

## ムギ類黒節病

### 1 病害の特徴

ムギ類黒節病は細菌の一種 *Pseudomonas syringae* pv. *syringae* (シュードモナス・シリング・パソバー・シリング)によって発生する病害です。本細菌による病害の多くは冷涼多雨で多発しますが、本病は低温多湿で好発するため、2～4月の多雨は発生を大きく助長します。病名は黒節病ですが、節以外にも、葉身や葉鞘、穂など、ムギの各部位に病徴が生じます。

### 2 被害のようす

- (1) 地際部の葉鞘に不整形で黒褐色の病斑を生じます(写真1・2)。オオムギでは葉身の中肋(葉身の中央を通る太い葉脈)に沿った黒褐色の大型病斑を生じることもあります(写真3)。
- (2) コムギでは葉身の中肋に沿った大型病斑(写真4)を生じることは少なく、地際部の葉鞘や稈に褐色の病斑を生じたり、止め葉の葉鞘に褐色斑紋状の病斑を生じる場合が多いです(写真5・6)。
- (3) 病名のように稈の節部に黒褐色の病斑(写真7)を生じますが、節の黒褐変よりも葉鞘や葉身に病徴が生じることが多いため、黒節病が発生していることを見落とすことがあります。
- (4) 穂にも病徴を生じ、オオムギ、コムギとも「穂焼け症状」を起こします(写真8・9)。
- (5) 本病の発生が大幅な減収につながることはほとんどありませんが、種子伝染性病害のため種子生産の場合は阻害要因となります。



写真1 稈の地際部の病斑(オオムギ)



写真2 稈の地際部の病斑(コムギ)



写真3 葉身の中肋に沿った大型病斑(オオムギ)



写真4 葉身中肋に沿った病斑(コムギ)



写真5 稈の褐変(コムギ)



写真6 葉鞘の斑紋(コムギ)



写真7 節の黒褐変(オオムギ)



写真8 オオムギの穂焼け症状



写真9 コムギの穂焼け症状

### 3 伝染方法

種子伝染します。ムギ類種子の表面や胚芽部分に存在する病原細菌がムギの発芽・生育とともに感染して発病させます。病原細菌は乾燥に強く、種子のほか、罹病麦稈や残渣で生残して伝染源になると考えられます。

### 4 発生生態

- (1) 病徴は、最高分けつ期頃より認められるようになり、茎立ち期を過ぎる頃から明瞭になってきます。
- (2) 軟弱・徒長気味に生育したムギが低温に遭遇して凍害を受け、その後の降雨で多発しやすくなります。

### 5 防除時期と防除方法

#### (1) 耕種的防除

- ア 種子伝染しますので、健全な種子の確保が第一となります。採種ほ産種子がある品種は、採種ほ産種子を使用してください。
- イ 品種や栽培条件にもよりますが、播種時期を慣行栽培より3週間程度遅らせると、本病による病徴発現を抑制できる場合があります。晩播栽培の場合は、播種量を2割程度多くします。
- ウ 発病したほ場の麦稈等はすき込まず、ほ場外に持ち出して、野菜・果樹等(マメ科、ウリ科、バラ科核果類を除く)の敷きわらなどに利用しましょう。

#### (2) 薬剤防除

発病後の防除は困難です。自家採種した種子を使用する場合は、本病に登録のある薬剤で種子消毒を実施しましょう。特に、金属銀水和剤による種子消毒が効果的です。

■ 発行 令和5年6月 埼玉県病害虫防除所

■ 問合せ先

埼玉県農業技術研究センター病害虫研究担当 TEL048-536-0409

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国 埼玉県